Rio+20 報告書ご送付に当って、

社団法人　グローバル・コンパクト・ジャパンネットワーク
代表理事　有馬利男

2012 年の６月、ブラジルのリオデジャネイロにおいて、Rio+20 が開催されました。1992 年、Rio で世界各国の指導者、企業経営者、NGO などが集まり、気候変動や生物多様性という地球的課題に対して、先進国と途上国が責任を分かち合い、力を出し合って取り組んでゆくことが合意されてから 20 年経った今年の Rio+20 は大きな期待を集めました。６月の 16 日から 19 日までは国連グローバル・コンパクトを中心とする民間主催の Forum が数多く開催され、20 日から 22 日までは、国連が主催する政府間会議が行われました。

政府間の会議は、『我々の求める未来』というテーマで世界中から集められた数多くの主張や提言を取りまとめ、合意することが大きな狙いとなりましたが、20 年前には意識されなかった先進国、新興国、開発途上国間の複雑な利害や力関係が表面化することにより、期待されたほどの大きな成果は上がらなかったというのが大方の見方ではないかと思われます。

一方で、民間が主催したサイドイベントは、国連グローバル・コンパクト主催の『Corporate Sustainability Forum』を始めとして大きな盛り上がりを見せました。CSF は、世界 100 カ国以上から 20 のローカルネットワーク、2700 名以上の参加者があり、120 を超える個別のセッションが開催されました。その結果多くの企業の CEO、投資銀行のトップ、アカデミアや NGO の代表などによって、『Green Industry Platform』、『Sustainable Investment』、『統合報告への支持』、『自然資本宣言』など、およそ 200 の Action Commitments が合意されました。ジャパンネットワークが主催したセッションでは日本企業３社の事例が発表され、会場から多くの質問が続きました。参加いただいた皆様には改めて御礼を申し上げます。

このように、Rio+20 では、民間の力と意欲そしてスピード感の重要性が改めて認識される結果となりましたが、これは、民間が大きな役割を担うという、新しい時代のグローバリゼーションの第一歩

を告げるものかも知れません。しかしそのためには、このような民間の Initiatives を継続的に発展させてゆくことと、それらを国連や政府間の合意のためのエネルギーにも変えてゆくことが必要です。その推進のプラットフォームである国連グローバル・コンパクトと、ローカルネットワークの重要性を改めて認識した Rio+20 でもあったという私の個人的な感想を最後に申し上げたいと思います。

詳細につきましては、レポートの内容を見ていただきたく、また、別途報告会も予定いたしておりますので、そちらにもご参加賜りますようご案内申し上げます。

以上